

第四章 八木重吉——《かなしみ》——

最後に、近代的自己を踏まえ、自己を捨て去ることなく、キリスト教的な神とのかかわりを生きようとした、大正期の詩人、八木重吉（明治三一―昭和二）の信仰について考えたい。

一、八木の詩の特徴

八木重吉は明治三十一年に、東京府南多摩郡堺村（現東京都町田市相原町）、津久井湖や高尾山もさほど遠くない場所に生まれた。現在でこそ、都心のベッドタウンとして開け、都心部の大学なども移転してきているが、当時はまったくの閉鎖的寒村で、東京の最新の文化とは隔絶した土地であった。八木の家は代々その地の農家であり、彼はその長男であった。

この世代が成人するのは、先に取り上げた西村茂樹、内村鑑三、綱島梁川とは異なり、大正期である。八木は地元の小学校に通ったのち、大正元年、一四歳で鎌倉の神奈川県師範学校予科へ入学し、そこで五年間を過ごすこととなる。そこでの刺激に満ちた生活の中で、彼は特に英語に心惹かれ、大正六年、一九歳の折りに東京高等師範学校に進学する。そこで二三歳までを過ごしている。①

この間、大正八年、富永徳麿（明治八―昭和五）の駒込教会で富永から受洗している。富永は大分出身で、地元鶴谷学館に在学中に、同校に赴任した國木田独歩に見出され、彼に伴われて上京したという経歴の持ち主である。彼は、明治四〇年に駒込基督会を創立したが、その信仰は「神人合一」を目指すもので、キリストは十字架にかかるために来たのではない、人を神の子にするために来たのであるとさえ述べている。そのため、日本プロテスタント史の上においては、いわば異端的存在であった②。

それゆえ、八木がこの富永のもとで受洗したことは、他の教会で受洗するのとはまた「意義を異にする③」。しかし、富永自身の日記によれば、八木が富永のもとをはじめて訪れたときには、彼はすでに受洗の意志をかため、受洗を急いでいたふうが伺われるのである。他に資料がなく、それまでの経緯など詳細な事情は不明であるが、その後、八木が富永のもとに長く留まった形跡もないうえに、またなによりも八木の詩を見る限り、富永の「神人合一」を標榜する思想が、八木の信仰に直接に強い影響を与えることはなかったと考え

① 田中清光『詩人八木重吉』一九六九年、麥書房、参照。

② 鶴沼裕子『近代日本のキリスト教思想家たち』一九八八年、日本基督教団出版局、参照。

③ 田中清光・前掲書、二四二頁。

るべきであろう。

彼の詩作の数が増えてくるのは、結婚して、なおさらに肋膜炎を患うという転機が訪れた二四歳頃からである。その後、二九歳で病死するまでのわずか六年間に、彼は膨大な詩を読み、独自のスタイルを確立した。

ところで、彼は、一般的にはキリスト教詩人として知られており、また実際キリスト者として、信仰に生きた。しかし、実際に彼の詩集を手にしてむしろ印象的なのは、たとえば次のような詩である。

素朴な琴

この明るさのなかへ

ひとつの素朴な琴をおけば

秋の美しくさに耐へかね

琴はしづかに鳴りいだすだらう①

(『貧しき信徒』)

この「素朴な琴」に代表されるように、八木の詩は、ある種の明るさに貫かれ、その明るさが、安易な宗教臭を感じさせない、しかし、それにもかかわらず超越的なものを暗示する、透明感ある詩世界を形成している。

彼の詩は、「ひとりキリスト教の専有物」であつたり、「ましてや、キリスト教の教義の言い替え(パラフレーズ)であるなどと解釈」するだけでは解釈し尽くすことのできない②、独自で芸術性の高い作品である。

しかし、彼の詩は、彼と超越的なものとのかわり抜きに論じることとはできない。詩にあらわれる、世界に対するまなざしを支えるものこそが、彼の信仰であるからであり、その信仰の、詩人ゆえの発露が、単に護教的でなく、普遍的、かつ芸術性の高い表現となっているのである。むしろ彼が、日本のキリスト教界で横行してきた無神経で貧弱な日本語を一顧だにしなかったことにおいて、彼の成熟した信が証しされているというべきであろう。

ところで、八木の詩にはいくつかのキーワードがある。「素朴な琴」にみられる『明るさ』や『静けさ』もその例であるが、いまひとつ『かなしみ』の語があげられる。読者にとって、この頻出する『かなしみ』の語は、八木の詩を鑑賞する際の、ひとつのメルクマールとなる。というのは、彼がみずからの心情をあらわす語のほとんどといっていいほどを、この語によって表現しているからである。

①『八木重吉全集』(以下『八木全集』)二巻、一九八二年、筑摩書房、三七頁、『貧しき信徒』所収。「素朴な琴」は、大正一四年一月二二日編「晩秋」に初稿がある。

②『日本の詩 八木重吉』一九七五年、ほるぷ出版、斎藤正二「人と作品」四三〇頁参照。

ところが、彼の詩全体を俯瞰した場合、この語は、終始一貫した一様な心の動きを指すものでないことがわかる。彼はこの《かなしみ》の内包するものを、わずかな詩作期間のうちに、無意識的に変容させた。そして、その微妙な変化のうちにこそ、彼の信のありようの軌跡を見ることができるのである。そこで、以下、八木の《かなしみ》の語の内包するものの変容を通して、彼の信仰の深化と、その特徴について考えてみたい。

二、自己と世界との共鳴、共振

岩波『古語辞典』①によれば、「かなし」という語は、「自分の力ではとても及ばないと感じる切なさ」をあらわす形容詞「愛し」、「悲し」であり、また「し兼ねる」の「動詞カネ」と同根であろうとされている。

八木の《かなしみ》は、基本的には、常になんらかの「及ばない」「切なさ」であった。しかし、《かなしみ》という語の見えはじめた当初において顕著なのは、《かなしみ》が世界と自己の心貫いて流れるものとして捉えられ、「及ばな」さというよりむしろ、全的ではないが自己が世界とがなんらかの同質性をもっていたという点である。たとえば、以下のような詩がある。

貫ぬく 光

はじめに ひかりがありました
ひかりは 哀しかったのです、

ひかりは
ありと あらゆるものを
つらぬいて ながれました、
あらゆるものに 息を あたへました
にんげんのころも
ひかりのなかに うまれました
いつまでも いつまでも
かなしかれと 祝福れながら②

（『秋の瞳』）

①大野晋、佐竹昭広、前田金五郎編、一九九〇年補訂版。

②『八木全集』一卷、九九頁、詩集『秋の瞳』所収。大正二二年九月二八日編「詩集鳩がとぶ」に初稿がある。

また上掲の詩の前段階と思われる、以下のような詩稿も残されている。

はじめに 光りがあった、

光りは 悲しかったにちがいあるまい、

一つの白い雲のうつくしさ 山なみの おごそかさ しづかさ、

かなしい日のほかには かくれてわからない、①

(「詩集 花が咲いた」)

ここでは、「かなしみ」は、「ひかり」の「哀し」みであると同時に、「にんげん」のもでもあった。彼は、「ひかり」の《かなしみ》が、「ありと あらゆるものを／つらぬいて ながれ」ていることを感じている。つまりここで、みずからがもつ《かなしみ》と、「ひかり」の《かなしみ》とは同質のものと感じられている。

このような《かなしみ》は、単に主体のうちにのみ揺れ動く感情ではなく、外部から促されることによって生じる心の働きである。また、そのような外部からの促しは、それによつてはじめて外部の世界の「うつくしさ」、「おごそかさ しづかさ」を感受することができるという、自己と世界との共鳴、共振を促すものであったといえよう。

彼は、このような《かなしみ》を、逆に、外界に向けて「たかく なりひびいてゆく」ものとしても感じている。

かなしみはたかく なりひびいてゆく、

銀色の ちからづよい 波とうまれて

しづかに しづかに さかまいて ゆく、②

(「詩集 鳩がとぶ」)

「ひびき」も彼の好んで用いた語である。《かなしみ》は、外からの促しによって生ずるものであり、また同時に、内から外へ向けても発せられ、それは外界に「なりひびく」とされる。

このように、みずからの内面と外部世界とが響き合うありようを、当初、彼は《かなしみ》という語によって表現しようとしていたのである。そのような《かなしみ》は、「よろこび」と紙一重であった。

わたしの ライフが 哀しみになり切ったとき

わたしの詩は よろこびにふるへながれる、

①『八木全集』一卷、一〇四頁。大正一二年一〇月一八日編「詩集 花が咲いた」所収。

②『八木全集』一卷、九二頁。大正一二年九月二八日編「詩集 鳩がとぶ」所収。

わたしは大地、詩は 花、

ああ、かなしみの生む よろこびにたぐふべき

そのよろこびはないものと きいてはゐたが

しかし しかし

この 孤独ゆく 憂鬱の路を

ああ いくたりの人がしつてゐるのだらう・①

(「詩集 花が咲いた」)

このような「よろこび」に通ずる《かなしみ》について考えるとき、「もののあはれ」という古語を思い起こす。

本居宣長が、「もののあはれを知る」ことを「物の心」、「ことの心」を「知る」こととしたように、「あはれ」は、外界の事物、事象に対する同情、共感を示す語である。しかし、それは同時にまた、元来「讃嘆・喜びの気持を表わす際に発する声②」であり、つまり、心になにごとかを感受した際に受ける感動を表明した語でもあった。

八木の《かなしみ》も、先に述べたように、外界、あるいは「ひかり」で表現されるような超越者との共感、共振を意味する語であり、同時にまた、それが極まることによつて「よろこびにふるへながれる」といった質のものとして、そもそもはネガティブな心情にのみ限定されて用いられたものではなかったといえよう。彼が、詩作の初期に用いた《かなしみ》とは、一面においてはそのような場合に用いられた言葉であつた。

しかし、留意すべきなのは、なぜそのような感情を表現するに際して、《かなしみ》という、実際にはネガティブな感情をあらわす語が選ばれたのか、という点である。最初に述べたように、《かなしみ》は、元来「自分の力ではとても及ばないと感じる切なさ」をあらわす語である。いかに彼の《かなしみ》が、「よろこび」と紙一重な感情であるにせよ、そこには、単純な感動の表明に限定できない、この語がそもそも担っている否定的な側面が意識されていたと考えられる。それは「この 孤独ゆく 憂鬱の路を／ああ いくたりの人がしつてゐるのだらう」と、「よろこび」と同時に「孤独」が嘆かれるゆえんでもある。

坂部恵氏は、「日本思想の伝統における倫理学と美学の感情的基底について」のなかで、日本人の思考の感情的基盤のありかたをあきらかにする手がかりとして、「かなし」の語を分析し、次のように述べている。

／＼かなしⅤという情態において、ひととは、自己自身であると同時に、彼または彼女がひとときわ強く愛着をいだいている他のひとの身をも兼ねたいと(空しくも)望む。その結

①『八木全集』一卷、一〇六頁。大正十二年一月一八日編「詩集 花が咲いた」所収。

②前掲、『岩波古語辞典』「あはれ」の項参照。

果は、必然的に、一方で、「自分の力ではとても及ばない」という感じないしは決定的な断念であり、同時に、他方で、深い哀しみ・多くの場合、徹底した無償の愛と結びつき、あるいはそうした愛へと転形する深い哀しみにほかならないということになる。

①

(坂部恵『鏡のなかの日本語』)

坂部氏は、古語《かなし》がもつ「し兼ねる」の動詞「カネ」という語のもつ意味を問題としながら、そこに自己と他者の問題を読み込んでいる。氏の解釈が示唆することは、八木が、神に対して「ひととき強く愛着をいだ」きながら、しかし、その「身をも兼ねたい」ということを一方で「とても及ばない」と感じていたのではないか、ということである。無論、「ひかりは 哀しかったのです」というときの八木は、「ひかり」に象徴される超越的なものに、みずから「とても及ばない」という自覚を明確にはもっていないが、たにちがいない。しかし、彼がここで《かなし》という語を直観的にせよ用いているのは、なんらかの「及ばな」さや「断念」を、超越的なものに対して彼がこの時点ですでに漠然と感じていたからではないだろうか。

そうした「断念」は、やがて彼の中で徐々に優勢となってくる。そこで次に、そのような「断念」を含む、先の《かなし》とは別の様相を呈する《かなし》について見てみたい。

三、罪の発見

ひかりと

わたしと むかひ合ってたつとき

ちぐはぐな おもひのかなしさ②

(「詩集 花が咲いた」)

ここでの《かなし》は、最初に引用した「貫ぬく 光」の「ひかり」の《かなし》や、「一つの白い雲のうつくしさ」、「山なみの おごそかさ しづかさ」を感受できる《かなし》とは様相が異なるものである。この《かなし》においては、先に見た「たくなりひびいてゆく」ような、外へのベクトルが影を潜め、かわって孤独、神との乖離といった、自己の内面への志向性が顕著となる。それは「ひかり」と大きな隔たりのあるところに存在する、「わたし」ひとりの感懐であった。

なにもかも 捨てきれはしないのだから

①坂部恵『鏡のなかの日本語』一八八九年、ちくまライブラリー、一一一～一二頁。

②『八木全集』一卷、一三〇頁。大正一二年一〇月一八日編「詩集 花が咲いた」所収。

わたしは 完いものでは ありません、

美しいもののすがたを 追ふにつかれてはをりますが

きりすとの道にはとほいのですから

それはそれは かなしいのです、①

(「詩集 どんふいんのうた」)

彼がここで《かなし》んでいるのは、先に述べた超越的なものへの「及ばな」さである。

さらに、その「及ばな」さの内実はなにかといえば、それは、みずからがキリストの言葉から遠いこと、つまり、キリストの教え通りに生きられないという問題であったといえよう。これは、前章で論じた綱島梁川の「二元的懷疑時代」の到来と同じ問題である。この問題に行き着いたとき、彼は樂觀的に世界との共感を歌うことに、明らかに挫折した。同時期に、たとえば以下のような詩がある。

かなしげに夜はかぜがふく

つかれたるいちにんの男ははてもなくゆく

成しがたいことを成したいとねがふ

天国の外によいものはしらない

中間に迷ひながら

迷ふべからじとなすゆえのこのかなしさ②

(「詩稿 柳もかるく」)

彼は、みずからを「つかれたるいちにんの男」と語り、「『自分だけは(神さまのところへ※引用者註)とんでやる』とあせ」ったが「やっぱり、とんでゆけなかった」という夢を見る③。神に「及ばない」ことが切実に自覚され、その苦しみが強調されるようになるのは、このようにみずからが「完」くあることができない、正しくあることができないという問題においてであった。

①『八木全集』一卷、一三六頁。大正一三年一月二〇日編「詩集 どんふいんのうた」所収。
(一九二四)

②『八木全集』一卷、一六六頁。大正一三年四月一五日編「詩稿 柳もかるく」所収。
(一九二四)

③「(前略)」

『あの陽のむかうに 神さまがある』

わたしは たしかにそうかんじた、

そして『自分だけはとんでやる』とあせった、

しかし、だめだった、

やっぱり、とんでゆけなかった

もがいてゐたらばめがさめた」

『八木全集』一卷、一四五頁。大正一三年四月七日編「詩稿 幼き怒り」所収。
(一九二四)

しかし元来《かなしみ》は、いずれにせよ、なんらかの関係性を前提にした語である①。彼は、このような神との乖離の状態を、なお《かなしみ》という語によって表現した。このことは、彼が神との乖離を自覚しつつも、完全には独我的になり得なかったことを示している。彼は先の詩で、「中間に迷ひながら」という言葉を用いている。この「中間」とは、「天国」と此岸との「中間」のことである。つまり、彼は、あくまでもみずからの視線の先に「天国」を置いているのである。

神との天真爛漫な「ひびき」合いが、遠かれ近かれその神が真であり善であることを見せつけ始める過程については、先に内村鑑三の「天国の一瞥」や、あるいは綱島の「二元」世界的発見においてみたとおりである。ただしたとえば内村の場合には、天国の瞥見と罪人の発見が表裏一体をなしていたのに比べ、綱島や八木は、その過程を引き延ばして、移りゆきを丹念に詩において辿っているということができよう。

もつとも、彼はこうした神との乖離を当初から直観し、それゆえ詩作の初めから「及ばな」さをあらわず《かなしみ》の語を用いたのであるが、いずれにせよ、その語の孕む「及ばな」さは、ここに至ってはじめて恢復不可能な距離として自覚されるようになったのである。

ところで、彼のこの《かなしみ》は、同時代人である宮沢賢治の「修羅」の煩悶とも相通じている。賢治も八木も、ともに決してニヒリズムに墮さず、生涯超越的なものとの対峙に生きた宗教者であり、かつそのことを文学という形式で表現しようとした点で共通している。しかし、賢治が「ほんとうのこと」との乖離の苦しみを、「修羅」性として抱え続けたことに比べ、八木は、このような不安定な一点に長く立ち続けなかった。無論八木も、神との乖離を完全に超克し切って、たとえば綱島梁川の「神人如實の關係」のような境地に至ることはなかったが、しかし、八木もまた、その煩悶に立ち止まり膠着することなく、乖離を見定めると同時に、このことの《かなしみ》を引き受け、定位させるべく模索を開始するのである。

四、かなしみをうたひて／さひわひとなす

「一つの白い雲のうつくしさ」や「山なみの おごそかさ しづかさ」を感受し、共振することのできるような《かなしみ》を失い、神との乖離をひたすら嘆くことのみ、《かなしみ》を見出すこととなった八木は、結局この乖離自体を超克することはなかった。し

①坂部恵・前掲書、一〇八頁に、「かなし」について以下のようにある。「『かなし』は、今日の日本語の用法では、『悲しい』の意味で使われるが、元来は、能動的共感と受動的諦念の両契機から成る人間の他者にたいするもつとも基底的なかわり方を意味する語であつた。」

かし、彼はその諦めを生きつつ、それでもなお超越的なものへ目を上げることが断念しなかった。あいかわらず『かなしみ』の語を用いつつ、彼は、執拗に詩作を続ける。

かなしいことはあるのだが

けふはこうして さまよふゆえ

やなぎの春のかるやかさ

ひとひらのさくらのような空のこころをよろこべよ①

（「詩稿 逝春

賦」

彼はこの詩において「やなぎの春のかるやかさ」や「ひとひらのさくらのような空のこころ」を、以前のような、神との「ひびき」合いとして感受しているのではない。断念は断念として、厳然とみずからの前にあつて、それを痛感しながら、そのうえで頭を上げて「やなぎの春のかるやかさ」や「ひとひらのさくらのような空のこころ」を感じ、「よろこび」たいと切望しているのである。

そこには、彼の詩作の行き詰まりと、その打開への方向性が示されている。

うたうべき

さひわひのなき日は

もだすべきか

あるひはまた

かなしみをうたひて

それをすなわち

さひわひとなすべきか いなか②

（「欠題詩群（一）」）

彼は、神と乖離した自己の内奥の苦しみをえぐり出して、それを言葉にするといった詩のスタイルをとらなかった。それゆえ、みずからの内面の罪の問題が、彼の中で徐々に膨らむことによって、「もだすべきか」（沈黙すべきか）とみずからの詩人としての限界を考えるようになった。そこには、以下の詩にあるように、詩は「永遠」を歌うべきもの、という八木の作詩観があった。

わたしは弱い

しかし かならず永遠をおもふてうたふ

わたしの死ぬるのちにかがやかぬ詩なら

①『八木全集』一卷、一七八頁。大正一三年五月二三日編「詩稿 逝春賦」所収。

②『八木全集』一卷、二二五頁。大正一三年一〇月編「欠題詩群（一）」より。

いまめのまへでほろびてしまへ①

(「幼き歩み」)

「永遠」とは、超越的なものに通ずるなにごとかを指しているといつてよいであろう。彼が失った「うたうべき／さひわひ」とは、そのような「永遠」の世界のことであつたと言ひ換えることができる。「うたうべき」ものがない、ということは、つまり、神の世界との共鳴、共振の状態に彼がない、ということを示している。

しかし、それでも彼は、そうしたありようにおいても、なお「うたうべき」もの——神につながるもの——を見出そうとした。それが「かなしみをうたひて／それをすなわち／さひわひとなす」というしかたであつた。彼はその「及ばなさ」を痛感することそれ自体に、「さひわひ」——神の側に通ずる回路——を見出そうとしたのである。

おほくくづしては

すこしくたつる

わがこころのかなしさは

またしんじつそのものへゆくみちのかなしさなり②

(「純情を慕ひて」)

彼は、《かなしみ》とは「しんじつそのものへゆくみちのかなしさ」であると考えた。「しんじつそのもの」とは神の世界であり、そこへ「ゆくみち」とは、神の側に通ずる回路を指しているであろう。彼はみずからの「及ばな」さの《かなしみ》を、神への「みち」と信じて受け入れ、それ自体を「さひわひ」としようとしたのである。《かなしみ》の語には、対象に対する「愛着」が前提にあると坂部氏も述べているが、《かなしみ》が神の「みち」——神への回路——となるという発見は、神への「愛着」、そのみが「うたうべき／さひわひ」だということである。

このかなしみを

よし　とうべなうとき

そこにたちまち　ひかりがうまれる

ぜつぼうと　すくひの

はかないまでのかすかなひとすぢ③

(「幼き歩み」)

こうして、彼は《かなしみ》を「よし」と肯うことになった。そこに生ずる「ひかり」は、もはや、神の側から直接照射される「ひかり」ではなかったが、それでも、「かすか

①『八木全集』一卷、三〇七頁。大正一三年一月一四日編「幼き歩み」所収。

②『八木全集』一卷、二九一頁。大正一三年一月四日編「純情を慕ひて」所収。

③『八木全集』一卷、三〇七頁。大正一三年一月一四日編「幼き歩み」所収。

な」「すくひ」となり得るような「ひかり」——神への回路——であった。

そうした「ひかり」の発見と同時に、彼の《かなしみ》は、突き詰められる前に解放されていくようになる。彼は、ある詩篇を「論理は溶ける」①と銘打ったが、そのタイトルに象徴されるような、ある種のエポケーが多く歌われるようになるのである。

くろい弓にはじかれたように

かなしみのつるに追われて

児をいだき

あさのみちをゆけば

ふと もくせいのかきこえ

わたしの

かなしみを酔わせ

花のようにかほりよく咲かせてしまふ②

（「欠題詩篇（二）」）

「かなしみを酔わせ／花のようにかほりよく咲かせてしまふ」という表現は、かつての閉塞的な罪の苦しみが、ある意味で解消したことを示している。

考がひかる

かなしくものをかんがへてゐると

かんがへのすえはひかって消えてしまふ③

（「詩しづかな朝」）

彼がここで「消えてしま」ったとしているのは、《かなしみ》そのものというよりも、むしろ《かなしみ》についての「かんがへ」である。神と乖離したみずからの罪人としてのありようを、自己の内面において反芻し、解釈しようとする、終わりのなき煩悶を中止することによって、《かなしみ》という、元来方向性をもった感情が、ふたたび自己の外へ向けて発動しはじめたことを、この詩は示している。

そのような自己の外に、確実に見えてきたのが、身近な事物の彩りであった。

秋になったゆえか

たべものの どれもこれも

かなしみのひとつひとつのことばのようでない

①大正一四年六月一二日編『八木全集』二巻、一二四～一三〇頁。

②『八木全集』一巻、二四五頁。大正一三年一〇月編「欠題詩篇（二）」より。

③『八木全集』二巻、一八五頁。大正一四年一〇月八日「詩しづかな朝」所収。

だがすこしさめかげんの

このさつまいものうれしさよ

かなしみはかなしみだけれど

おどけたところがちよつとばかり　のぞいてゐる①

（「神をおもふ秋」）

かなしみの日は

山なみの

その山ひだのながれにすら

こころをつつくようないたみをかんずる②

（「神をおもふ秋」）

この二つの詩に用いられている《かなしみ》の語は、彼自身のものでもあり、また同時に「さつまいも」や「山なみ」のものでもある。しかし、もはや彼は、「さつまいも」や「山なみ」を、直接に神の側のものとして、それとの「なりひびく」ような共鳴、共振を歌っているのではない。彼は、自分と同じく神との乖離した側にあるという《かなしみ》を背負った、地にあるものとして、それらをあらためて見出したのである。

五、愛^{かな}しみ

このような地にあるものを歌う詩は、やがて、『貧しき信徒』の時代（大正一四年四月以降）に至り、八木独自のスタイルとして確立することとなる。それは、身近な自然、愛娘桃子、小動物などの描写と、それらに対する所感とを、ほとんど平仮名の、簡潔なスタイルで表現したものであり、明らかにそれまでの詩と異なった傾向をもっている。

花

おとなしくして居ると

花花が咲くのねつて　桃子が云ふ③

（『貧しき信徒』）

果物

- ①『八木全集』一卷、二七七頁。大正一三年一〇月二六日編「神をおもふ秋」所収。
②『八木全集』一卷、二八〇頁。大正一三年一〇月二六日編「神をおもふ秋」所収。
③『八木全集』二巻、一八頁。『貧しき信徒』所収。大正一五年二月二七日編「信仰詩篇」に初稿がある。

秋になると

果物はなにもかも忘れてしまつて
うつとりと實のつてゆくらしい①

(『貧しき信徒』)

こうした詩のスタイルは、彼がもはや超越的なものを顧みなくなったことを示すものではない。むしろ彼は、「桃子」や「うつとりと實のつてゆく」「果物」を歌うことそれ自体に、超越的なものの「かすかな」「ひとすぢ」の「ひかり」――神への回路――を見出しているというべきである。そこに歌われているものは、地にあるものの健気さに対する愛おしみの心であつた。

先に「かなし」の語の分析の中で、坂部氏が、「徹底した無償の愛と結びつき、あるいはそうした愛へと転形する」《かなしみ》の一面について述べていたとおり、八木の《かなしみ》は、ここに至つて、神との共感を歌う楽天的な《かなしみ》や、神との乖離を嘆く内向的な《かなしみ》から、《かなしみ》それ自体を肯うことによつて、他を愛するという《かなしみ》――愛^{かな}しみ――に逢着したということが出来る。

死を目前に、病篤くなつた八木は、しきりとこのような小さき者たちを歌うようになる。それはたとえば以下のような詩群である。

春

桃子

お父ちゃんはね

早く快くなつて お前と遊びたいよ②

(『貧しき信徒』)

春の夜

桃子はノコノコ這ひ出して

赤いねまきのまんま踊りはじめた

一生懸命あっちへ行ったりこっちへ行ったりしてゐる③

(『信仰詩篇』)

このような詩がこの時期多く見られるのは、彼がもはや内向して《かなし》んでなどい

①『八木全集』二巻、一五頁。『貧しき信徒』所収。大正一四年一月三日編「詩 赤い寝衣」に初稿がある。

②『八木全集』二巻、一二五頁。『貧しき信徒』所収。大正一五年二月二七日編「信仰詩篇」に初稿がある。

③『八木全集』二巻、三〇二頁。大正一五年二月二七日編「信仰詩篇」所収。
(一九二六)

られない、切迫した思いに駆られていることを物語っている。彼は、愛する者として「自分の力」の「及ばな」さを痛感したが、しかし、その「及ばない」《かなしみ》を自分ひとりの内面的な感傷として託つ時間は、彼にはもはや残されていなかった。この詩篇をまとめていたころ彼は結核第二期と宣告され、翌年には死去しているのである。

ところで、このような《愛^{かな}しみ》を通して、八木はその姿から、みずからの《かなしみ》のあるべきりようを発見してもいるのである。

さて

あかんぼは

なぜに あん あん あん あん なくんだらうか

ほんとに

うるせいよ

あん あん あん あん

あん あん あん あん

うるさか ないよ

うるさか ないよ

よんでるんだよ

かみさまをよんでるんだよ

みんなもよびな

あんなに しつつこくよびな①

(「詩稿 ことば」)

「あかんぼ」の頼りなく小さいありようは、自分自身の頼りなさでもある。八木は、彼らが精一杯泣く姿に、《かなしみ》のあるべきありようを見出している。「あかんぼ」は、無論自覚的に「かみさまをよんで」いるのではない。しかし無力な「あかんぼ」が、飽きもせず懸命に泣くさまに、彼は、《かなしみ》を訴え続けることのもつ意味——「かみさまをよんでる」——を発見したのである。

こうして彼は、《かなしみ》の表現をとおして、挫折しかけていた詩作にふたび活路を拓いたのである。そのような詩作の境地について、八木は以下のように述べている。

私の詩よ

つひにひとつの称名であれ②

(「詩稿 桐の疎林」)

①『八木全集』二巻、一一四～五頁。大正一四年六月七日編「詩稿 ことば」所収。

②『八木全集』二巻、七八頁。大正一四年四月一九日編「詩稿 桐の疎林」所収。

また、同年作と考えられている詩に以下のようなものがある。

愛

ただひとつをうたおう

愛を生き

愛を生ききつてしぜんにうたおう

よろこばしいうたであるとおもおう①

（『断片詩稿』）

しかし、愛おいしいものたちを《かなし》み、歌うことが、なぜ神の名を呼ぶ「称名」となり得たのか。

《かなしみ》とは、先に述べたとおり、ある「ひととき強く愛着をいだいている」対象に対して、その身を兼ねたい、つまり一体化したいということを願う感情をあらわしている。

八木の場合、その一体化の願望は、当初神そのものに対して向けられた。しかし、直接的な神との一体化は、罪の自覚によって断念されざるを得なかった。その煩悶のうちに、やがて見出されてきたのが、同じく地にあつて健気に生きる者たちの姿であつた。八木は彼らを、弱々しい、守るべき愛おいしい者たちとして見出した。しかし、自分もまた弱々しい者であり、彼らの身を兼ね、完全に「及」ぶことのできない、有限な存在であつた。「きりすとの道にはとほい」②という諦めは、愛おいしい者たちを決して守りきることのできない現実を、彼に見せつけたからである。

しかし、そうした現実をそれとして認めた上で、彼はなお《愛し^{かな}》もうとした。それが彼の詩が最終的に獲得した《かなしみ》の境地であつた。決して、身を添わせ続けることのできない我が子を《かなし》むことをとおして、その子たちにとっての救いを求め続けた。そのような切迫した願いが、「つひにひとつの称名であれ」の言葉となつたのである。

高村光太郎は、八木の詩について、「八木重吉といふ詩人の天から授かつた詩的稟性が、人生の悲みに洗はれ、人生の愛にはぐくまれ、烈しい内的葛藤の果にやつと致ることの出来た彼独特の至妙な徹底境」③であると述べている。高村の言葉どおり、八木の詩は、愛

①『八木全集』二巻、三一四頁。「断片詩稿」（『八木全集』二巻、「編注」（四二八頁）によれば、大正一四年作と推定される）所収。

②『八木全集』一巻、一三六頁。大正一三年一月二〇日編「詩集 どんふいんの うた」

所収。

③昭和一八年、高村光太郎「序」『定本八木重吉詩集』一九五八年、彌生書房。

する隣人たちへの「愛」を通して、「彼独特の至妙な徹底境」へ至ったものである。

見返りを要求せず、ただみずからの愛おしみの心を表現するというありかたは、閉塞的な自己に拘泥するばかりでは決して見えてくることのないものである。このことは、いうまでもなく彼のキリスト教の神に対する信仰が前提となってはいる。しかし、近代的自己の多くが、そうした外へ向かう道筋を見出せずに、自己の閉塞状況の煩悶に終始したことを考えれば、八木の見出した《かなしみ》の境地は、近代的自己の超克という観点からみても、ひとつの「至妙な徹底境」であったということができないのではないだろうか。